

平成 4 年 1 2 月 1 5 日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土資料室

(青梅市駒木町 1-684 Tel0428-23-6859)

漆のはなし

御岳御嶽神社では、平成 5 年の式年大祭に向けて、青梅市当局の指導、監督の元で、幣拝殿の外側の漆塗り工事と彩色工事が行われている。漆職人は日光から五名、平成四年の二月に着工、実に約一年間におよぶ地道な作業である。漆塗りの工程は三十七工程、約一ミリの厚さに仕上げるまですべてが手作業である。「ぬし屋さん」と呼ばれる人達との一年間のお付き合いの中でいろいろなことを教えていただいた。

漆工事は、今までの漆を落とすことから始まる。漆には下地に土が使われているので、それが石のように硬くなっている。これを落とすには、良く歯の研がれた「タタキ」と呼ばれる道具で叩いて落とす。これもけして電動の道具は使わない。その理由は、漆は徐々に薄くなっていくのだが、それは平均に薄くなっていくのではなく、部分部分で違っているわけで、電動の道具で漆を剥ぎ取ろうとすると、その手加減が出来ず、建物の木肌を痛めてしまうのである。幅二、三センチの歯で、一、二ミリの間隔でコツコツ叩いて剥いていく。垂木、柱、壁、床を五人で一日中コツコツと叩く。これが何日も続く。これで一工程である。

細かな工程を除いて、漆塗りの工程は、刻草、布下地、地下地、切粉、錆下地、中塗り、上塗りの順でなされる。下地作りのそれぞれの名称は、漆に含まれる材料の違いで、「地下地」には、地の粉（関西方面の粒子のこまかい土）と上新粉で作った糊が、「切粉」はこれに砥の粉が、「錆下地」は漆に砥の粉だけが加わる。そしてその工程ごとに砥ぎの作業が入る。地下地も切粉も錆も一日で石のように硬くなる（漆がかたまるには水気が必要なので、晴れた日には一日では硬くならないが）。砥石で研ぎ、紙鑢で擦って表面を滑らかにしていく。ここまでは漆の地色の黒色で三十四工程を費やす。漆の朱色は最後の中塗りと仕上げ塗りのときに朱を入れて色付けされる。三十四工程の上に朱のための三工程がほどこされる。

ぬし屋さんは、足場の上で同じ作業を根気よく続ける。日光の家に帰るのは月に一度ほど、土曜も日曜も休まない。冬は寒風の中で、夏は汗と漆でからだは泥まみれになる。そして決して焦らない。実にコツコツと仕事をしていく。一日の仕事はなにをやったか判らない程のものに見える。そして足場が外されていっぺんにその全貌があらわれる。そしてわれわれが目にするのは朱色の表面だけである。こうして文化財が守られ、引き継がれていくのである。この一年多くのことを教えられた。それは、人の生き方、人生の重さというものに通じるものであるように思う。

(文責 金井國俊)